

不空院ガイドマニュアル 2026

本堂（ご参拝者が多い時は、ご本尊不空羂索観音様の説明だけで良い。）

山号は「春日山（しゅんにちざん）」で、「春日山不空院」がお寺の正式名称。

春日大社と深いつながりがある。

本尊の不空羂索観音像は、1986 年（昭和 61 年）、国の重要文化財に指定された。

（ヒノキ材、寄木造、漆箔、玉眼嵌入。）

春日大社の第一神である**武甕槌命**（たけみかづちのみこと）の変化（へんげ）のお姿。

そのために御前に鏡があり、両サイドに白い鹿が控えている。

肩に鹿の皮「鹿皮（ろくひ）」をまとう。よって、鹿皮観音（ろくひかんのん）とも呼ばれる。

このお姿を好んだ藤原氏が念持仏とした。それ以降、不空羂索観音を作らせなかったで、現在、全国で、10 体足らずしか残ってないといわれる。そのうちの五体が奈良市内にある。

ほかの 4 体は、興福寺南円堂の坐像、東大寺法華堂の立像、大安寺の立像、東鳴川町（奈良市北東部、京都府木津川市との境の近く）にある応現寺（おうげんじ）の坐像。

南円堂は、10 月 17 日のみ開帳される。不空院もその日に特別開帳。法華堂は、いつでも参拝できる（つまり、10/17 には、この三体が 1 日で拝観できる）。

奈良市内では、この三体を「三不空羂索観音」と称する。

お姿

一面三目八臂（いちめん・さんもく・はっぴ）。

顔が一つ、目が三つ。額の真ん中の目は仏眼。悟りを開いた者が持つ目。一切を見通す。

八本の臂（ひじ）

左手 蓮。仏眼があり、蓮の花が開いている。たった今悟りを開きましたという印。

右手 錫杖。

合掌

払子（ほっす） 邪念を払う。

左手 網（羂索） この仏像の名前の由来となった道具。

私たちが持つと、鳥、虫、魚等を捕る道具。仏さまが持つことで、人々を救済する象徴となる。

7 本目、8 本目 与願印 膝の後ろにある。掌を上に向け、全ての人を救うために待機されている手。

※「不空羂索」とは、この世はむなしからず。羂索で全ての人を救う。この仏の本願。

(参拝者が少ない時)

左の厨子に鑑真和上、右の厨子に弘法大師・空海が祀られている。時代は異なる。この不空院に逗留されたお二人のことが『大乘院寺社雑事記(だいじょういん じしゃぞう じき)』(興福寺門跡寺院の門主「尋尊、政覚、経尋」の三代にわたる日記 約 190 冊)の不空院の記述にある。

鑑真和上：

奈良時代、中国から渡来、東大寺に上げられる前、不空院に住まわれた。のち大仏殿前の仮堂で、聖武上皇らに、続いて多くの衆生に戒を授けた。東大寺で5年、唐招提寺で5年、戒律を講じ、戒を授けられた。10年間で約400人、資格を持った僧を育てられた。厨子の中の「鑑真和上像」は、和上250回忌に際し、唐招提寺による「国宝・鑑真和上像のレプリカ」制作のための「試みの像」の一体をいただいたもの。

弘法大師空海：

平安時代、藤原冬嗣が亡き父の願いによって、興福寺に南円堂を建立したが、その前に空海が不空院で南円堂の雛形として「八角円堂」を建立し、本尊不空羂索観音を造立したと伝わる。この八角円堂で、不空院・円晴、西大寺・叡尊、唐招提寺・覚盛(かくじょう)、西方院・有厳(ゆうごん)の4律僧が戒律を講じ戒を授けていた。

江戸時代、安政の大地震で堂宇のほとんどが崩壊し、仮堂の状態で近年を迎える。

大正時代、三谷弘厳師が本堂の再建を始めた。本堂は八角円堂の礎石の上に建立。

(2026年は、本堂が再建されて100年目の年。)

不空院は、律宗の祖である鑑真和上と真言密教の祖である弘法大師・空海の法灯を長く守り伝えている南都西大寺の末寺、真言律宗の寺である。

・本堂内陣小壁に、飛天、厨子の横に四天王像が描かれている。新薬師寺の先々代のご住職の作。

(毎特別開帳には、展示物が並ぶ。その説明はガイド当日の朝、お聞きする。覚えて説明。)

・東奥の間に、徳川歴代将軍の位牌を祀る。不空院は、江戸幕府から、20石賜っていた。

・境内の北東角に井上(いがみ／いのうえ)内親王のご霊塚。井上内親王は聖武天皇の第一皇女で、光仁天皇の皇后。光仁天皇を呪詛したとして子の他戸(おさべ)親王とともに幽閉され、非業の死を遂げた。その後たびたび起こった天変地異は、井上内親王の怨霊と考えられたことから、その霊を慰めるために祀られたと伝わる。手を合わせて、お進み下さい。

「鎮守堂」への拝観は、藤棚の下を通り、反時計回りにお進み下さい。

「えんきりさん」と「えんむすびさん」(本堂前)

えんむすびさん：市杵嶋姫（いちきしまひめ）大神、黒龍（こくりゅう）大神

えんきりさん：法龍（ほうりゅう）大善神

「縁切り寺」「かけこみ寺」とは、女性の立場が弱かった時代に不幸な縁から逃れ来た女性を受け入れ救済し、他に異議を唱えさせない特権を有した寺のこと。

縁切りの神を祀る不空院も、かつてはその役割を果たしていた。

昭和の初め、名芸妓（げいこ）「照葉（てるは）」と呼ばれた嵯峨祇王寺の高岡智照尼もこの寺に駆け込み、先々代住職・三谷弘厳和尚によってかくまわれてのち、出家されたのは有名な話。

そのような歴史から、境内の祠には今も縁切り祈願の参拝者が絶えないが、当寺では縁結びの神も並んで祀られている。結ぶと切るとは表裏一つのこと。「結ぶ時には切らねばならぬものがあり、切ろうとするには新たに結ぶが良い」との理。

（ご参考）「空海・叡尊ゆかり、女性に寄り添う寺」

（『奈良百寺巡礼』 当会編著 京阪奈新書）

新薬師寺の東にあり、山号は春日山（しゅんにちざん）。本尊の木造不空羂索（けんさく）観音坐像（鎌倉時代）は重文で、春日大社の武甕槌命（たけみかづちのみこと）の変化（へんげ）の姿と伝えます。

『大乘院寺社雑事（ぞうじ）記』には、鑑真和上が一時この地に住んでいたことや、興福寺南円堂建立の命を受けた空海がここに滞在し、ひな形の八角円堂を建てたことが記されています。また叡尊はこの寺で戒律を講じ、戒を受けました。

八角円堂は、江戸時代後期に起きた安政の大地震で倒壊、寺は明治初期の廃仏毀釈で廃寺となり、本尊は野ざらし同然に荒廃しましたが、大正末期に復興されました。

寺の鎮守であった宇賀弁財天女（室町時代）が福をもたらすことから、「福院」とも呼ばれました。江戸時代には、奈良町の芸妓（げいこ）たちが熱心に参拝したとか。境内には「えんきりさん」「えんむすびさん」の神が祀られ、井上（いがみ）内親王の御霊塚もあります。

駆け込み寺の役を果たしたことから、女性の願いをかなえる寺としても知られます。

昭和初期、もと新橋の名妓・照葉は当院に駆け込み、出家しました。高岡智照尼（ちしょうに）として京都・祇王寺の庵主になった生涯は、瀬戸内寂聴の小説『女徳』のモデルにもなりました。

本尊は毎年、春は大型連休の頃、秋は正倉院展の時期に特別開帳が行われます。また同じく不空羂索観音が安置された興福寺南円堂が開扉される十月十七日にも、特別開帳されます。近年、「かなで奉納」「地蔵盆夏祭り」などを催し、地域住民に親しまれています。（奈良まほろばソムリエの会 鉄田憲男）